占夢者人の夢　番外編

星河 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

占夢者人の夢　番外編

【Ｎコード】

Ｎ４８１４Ｄ

【作者名】

星河　翼

【あらすじ】

占夢者（ゆめとき）である、都往朔夜と、陰陽師の塚原叶の出会い編。中学時代の二人の巧妙なコンビネーションが紐解かれる！

#1　プロローグ

「もう、こんな所におられんわい！」
一人の金髪少年が、厳格な神社の前でそうのたまった。重そうなボストンバック一つを担ぎ、この弱い太陽の光を背に寒空の中、揺らぐ事のない決心がついたかのように前へと歩き出す。
塚原叶。それが彼の名前であった。
叶は、泉神社の跡取り息子であり、期待を一手に背負った陰陽師候補として育てられてきた。
何百年に一人の逸材。
過去この神社の神主に偉大な一人の陰陽師がいた。その人の名前は、塚原叶一郎上左衛門。叶の名前はその陰陽師からとられたと云う。
期待に添えるかどうかも赤ん坊の叶にとってみれば定かではないと云うのに……
両親は、何をするにも第一に、叶を厳しく育てるように写経やら、古い書物を押し付けてくる。特に厳しかったのは、父方の租父、良園であった。

『この子には、陰陽師。または、霊媒師としての素質がある』

そうのたまったばかりに、両親は祖父の跡を……この神社を継がせる事を約束してしまった。それはまだ幼かった叶の母に、不思議と霊が見えていたことが始まりだった。
「じいちゃん？あそこに座っとる女の人。何であんな所に一人で座っとるんや？」
神社の奥にある庭先の石段の所に腰を掛けて、静かに足下の階段を見詰めているその女。
それが元凶であった。

見えるはずの無いモノが見えてしまったのだ。それからの叶への教育は、あらゆる形で明るみになった。

そして、これが叶の最大の問題でもあった。

見たくもないモノさえ見てしまう事があるのは、図らずしも楽しい事ではなかった。それに、極一般の子供達と一緒に、野球や、サッカーをして遊びたかった。

だけど、叶には自由は許されなかった。授業が終わればすぐ帰宅して、宿題もさることながら、日夜、陰陽師としての修行が待っている。それがどれ程叶の心を痛ませていたかなど、誰にも理解は出来なかったことであろう。

もちろん友達などできるはずもなかった。

だから、ついに逃げ出した。

置き手紙を残すことなく、大阪のこの街から東京の親戚を頼りに、自らの貯金と母親の財布からくすねたお金で、混雑したＪＲ大阪駅に辿り着いたのである。

#1　プロローグ（後書き）

占夢者人シリーズの番外編です。
壱ノ巻を読まれてから読むとより一層判りやすいかと想われます。
もし宜しければ、どうぞ。

#2　出会い

▼出会い▼

親戚のおばさんは意外にも簡単に叶を受け入れてくれた。母親の姉で、正月くらいにしか顔を出してくる事はなかったが、子供がいない家庭だったので、喜んで受け入れてくれたのが何より有り難かった。

少し小太りではあったが、神経質な母とは違って、『ハキハキ』とものをいう気の良い優しいおばさんである。

そして、叶の境遇を履き間違える事もなかった。逆に共感してくれたのかも知れない。

「お母さんにはこの事上手く云っておいであげるから、そのかわりちゃんと、学校には行くのよ？」

それが、この場にいる事の条件であった為、徒歩でも通える近くの『聖樹中学校』に通う事になった。

叶は、有難かった。これで、人並みの学生生活が送れるのだと確信ができたから。

「おばさん、おおきに」

笑顔で話せるのに久しぶりのことだった為、新鮮な気持ちが芽生えた。

しかし、こんな都会で、新しく気の合う友達ができるのか？それが問題の一つである。今の今迄、友達付きあいをした事がなかったから……

でも、おばさんは早速入学手続きに叶と共に走った。明日からでも、入学して、学校に入れなければと想ったからなのであろう。いつまでも、義務教育を放棄する訳も行かず、考えを纏めてくれたらしい。

そして叶は、『聖樹中学校』へと中途転校を余儀無くされたので

あった。

「おはよう！」

学生たちは朝の寒空の下、互いに友人とありきたりの会話を交わしていた。

この学校は、進学率の高い有名な中学校で、お堅い校風と、秩序に守られた、実際叶がうんざりしそうな学校である。

それは、生徒手帳を手にした時に明らかになった事ではあるが……

その中で、新しい制服が出来上がってない為、学ラン姿の叶は独り浮いていた。その上金髪だからなおさらである。でもそんな事はどうでもよかった。自分はあんな引き締まったブレザーにネクタイの制服を好んで着たいなんて想わない。学ランだって、詰め襟のところを外してでも楽な格好がベストである。

しかし、そんなことよりもこの学校に流れている空気が気持ち悪かった。

叶に、自爆霊の類いがあちこちから声を掛けてくる。進学校であるためか、受験失敗を苦に自殺した生徒が自爆霊として留まっている光景が嫌でも目に入る。それに輪をかけたのが、戦争時ここが防空壕であったこと。戦死した人達が丁度、体育館南に固まっていた。

『チッ』と舌を打つ叶は、なるべく見ない振りを決めて、職員室のある部屋へと急いだ。

「今日から2年B組の新しい仲間になる塚原叶君だ。みんな仲良くするように」

担任の永瀬は叶を教室に連れて行くとそう云い放つ。

「よろしゅうたのんます」

関西訛りの言葉が教室に響く。

すると、生徒達は一同、叶に一度視線を注いだが、暫くするとざわめきが起こった。

「何で今頃転校生が来るんだろうね？」

それもそのはず、あと、2週間もすれば、冬休みへと突入する。そんな時期に転校してくる方がおかしい。
「塚原君は、家庭の事情があって、こちらに転校してきたんだ。えーと、それじゃあ、あの窓際の一番後ろの席が塚原君の席だから」
担任が指さす先を見た。
窓際だから、この時期寒いだろう事は予測がついたが、叶はまあ、しゃあないかと席へと歩き出す。
周りのみんなはそんな叶の、行動を見守った。叶はそんな視線をものともせず、自分の席へと座る。
「塚原君の教科書はまだ届いてないから、隣の都住君に見せてもらいなさい」
「はい」
都住と呼ばれたその少年は、几帳面なのか、潔癖性なのか？とにかく本にわざわざカバーを付けていた。それがとても印象的ではあったが、もっと不思議だったのは、都住の発しているオーラであった。
「僕、郵住朔夜って云います。よろしくね」
穏やかな少し大人びた笑顔がそのオーラを引き立たせる。叶には新鮮な驚きであった。
何がと云われると、普通持っている、人のオーラは寒色系の、青白い色なのに、彼が持っている色は、暖色系の、燃えるような赤色だったからだ。
「一時間目は数学なんだよ」
黒板を見れば一目で分かるのに、わざわざ説明してくる。律儀なヤツだと叶は想った。
朔夜は、丁寧な字で黒板に書かれている先生の文字を『スラスラ』と記していた、そして、雑学的な先生の会話の内、必要だをうなという事迄、余すことなく書き連ねている。
叶は感心した。こんな生徒がいるんだなと想うと、下手な落書きをしている自分のノートが見せられないとさえ想った。

厳かに過ぎ去って行く授業。それは、安心出来る時間でもあった。それは横にいる朔夜のオーラが心地良かったからもある。

「塚原君って関西の人なんだね～私、宮原麗華って云うの～よろしくね！」

一時間目が済んだ休み時間、内田有紀似の、可愛らしい女の子が独り話し掛けてきた。この麗華の人当たりの良さは、また叶を和ませた。

「あ、そうなんよ。関西弁って特徴あるからここでは浮くやろな？」

叶は嬉しかった。一見不真面目そうな見た目を気にせず話し掛けて来る。こういう会話が昔通にできる環境ってのは、初めてでもあるから。

「関西のどこ？」

「ああ、大阪やねん」

それ以上は答えれない。嫌な事をも想い出したくないから。

それにしても不思議だ。進学校という割には、休み時間に勉強している者が少ない。

「あ、麗華ずるい！私も仲間に入れてよ！」

何人かの女の子が輪を作ってやってきた。

しかし、隣の席の朔夜は静かに本を読んでいる。無口なキャラクターなのか？とも想ったが、そこに、一人の女の子がやってきて、何やら手紙を置いて行った。

「読んで下さい。そして、返事を下さい」

物静かな、びん底眼鏡を掛けた女の子がそれだけ云うと去って行った。

「今の子誰なん？」

回りの輪からひそひそ話しが起こるのを叶は見逃さなかった。

「副委員長の、宮川みどり。ここの所いつもなんだよね～都住君、夢占いケラブの部長でさあ、なんだか、その手の類いのことで相談してるらしいんだけど、まだ解決してないらしいのよぉ」

麗華は、呆れたって表情で話す。
「でも、都住君の夢占い当たるって評判なんだよ～だから、本当は私も時々占ってもらってるんだ～」
続けざま訊いてもない事を話し始める。
「夢占い？そんなクラブがあるんや？」
普通ありそうもないクラブ。叶はポカンと口を開けたまま放心状態に陥った。
「去年から都住君が部員集めて一つの部活動として成り立つようにって、生徒会に話を持ち込んだそうだよ～ま、生徒会長も、都住君の品性と、熱意に負けたって所あるからさ、上手い具合に話が纏まったんだ～」
口数が多い麗華は歩くスピーカーかも知れないなとも想ったが、口には出せない。こういう類の子は、何をネタにして話しだすか分からないと想ったから……
「ふーん」
相槌を打つだけ打つ叶。そんな事をしていると、
「キーンコーンカーンコーン」
予鈴チャイムが鳴った。
「じゃ、また後でね～」
『ルンルン』と跳ねながら、麗華は足早に、教卓前の席へと移動して行ったのである。

放課後迄に、叶に近づいてくる女の子に数知れなかった。珍しい生き物でも見るかのような視線を向ける者も一部いたけれど。
でも、叶はそんな女の子達に囲まれながらも極自然に話をする事ができた。
意外だった。自分がこんなに世間一般の話をすることが叶うなんて……
「でさ、塚原君は部活に入るの？だったら、テニス部に入らない？」
麗華は自分が入っている部活動を勧める。どうやら叶を気に入っ

たたらしい。
それは外見からくるものなのか？それとも叶白身に興味を持ったのかは分からないが。
「うーん。どうやろ？まだ考えとらんわ」
いきなり切り出されても困ってしまう。しかし、部活動という言葉は魅力的だった。
「他にどんな部活動が有るか調べてみたいわ」
とにかくそう答えた。
そうしないと、麗華のペースに巻き込まれそうな勢いだったから。こういう子のペースは分かりづらい。でも悪い気はしなかった。
「じゃあ、お先に」
隣の席の朔夜は、早々に鞄に荷物をしまい込むと、足早に教室を出て行った。
「みどりのことで、頭が一杯なのかもね～」
麗華は含み笑いをしている。可愛い顔をしてその実、ちょっと、野次馬根性が有るのかも知れないなと叶は想った。
「あ、俺も今日は帰るわ。付き合ってもらっておおきに」
叶は、そんな中を逃げ出すかのように鞄にノートと筆記用具を入れて麗華の脇を通り抜けて教室を出た。

叶はその廊下で朔夜が、みどりと話しているのを目撃することになる。
「殺される夢は、一種の幸運へと近づく意味合いをもってますから気にする必要はないですよ。前向きな夢ですから……自殺の夢と同様な意味合いも込めて……」
二人の話している内容が自然と耳に入ってきた。別に立ち聞きしている訳ではないけれど、叶は少しだけ戸惑ってしまった。
「そうなんですか？ありがとうございました」
みどりはそれを聴くと安心したように朔夜に礼を述べて立ち去る。三つ編みが左右に揺れていた。

朔夜は『ホッ』と息をつくと、叶がいる方へと歩き始めた。
「あ、塚原君……君も何か不思議な夢を見たなら占ってあげますから、いつでも良いので僕に相談して下さいね」
今しがたのことを聴いていたのを了解していたのか、朔夜は先に切り出した。
「俺、夢は見ないんよ……」
叶は呟くように、答えた。
「そんな事はないですよ。人は必ず夢を見ます。レム睡眠って御存知ですか？その時、人はなんらかの夢を見るものなんです」
まるで、宗教の勧誘のようだなと想った。
「そういうもんなんや？」
「ええ。だから、塚原君も夢は見てるはずなんです。ただ忘れてしまっているだけかも知れませんね」
朔夜はそういって、スタスタとその場を後にする。
叶は、こういった白分の範疇にない存在が不思議で仕方なかった。だけど、面白いヤツだなと想ったのは事実だった。

#3　陽だまりの中の憂鬱

▼陽だまりの中の憂鬱

「部活動なんにしよう？」

そんな事を考えながら、叶はおばさんの家を出る時に考えていた。

実の所スポーツは大の得意だ。だから、野球部にでも入ろうかなと想って仮入部して、見学してみたは良いがこの学校の体育部は練習量が少ない。それが叶をやる気にさせてはくれなかった。ある意味同好会って感じの部活だ。

大人しく帰宅部で勉学に励んだ方が良さそうかなとも想えた。しかし、勉強は嫌いだ。そんな時間があったら、街にくり出し、ウィンドーショッピングをしている方が無難かも知れないとさえ想えたから。

「塚原君？部活は決めた～？」

そんな事を考えている叶の前に、麗華は相変わらずの笑顔で席に来てはそれを訊いてくる。

「まだやねん」

そろそろ、どうしたいか考えなければならないのになと分かっているものの、全く気持ちの整理はつかない。

「あ、チャイムやで……席につかな……」

またいつもの授業が始まる。

こんなことで、楽しいのかどうかも怪しかった。自由を求めて東京迄来たは良い。しかし、気が抜けるばかりだ。

すると、突然の地震が、この教室を動かす。

それは震度４はあるだろうと想われる地震。

こういう時、あの地震発主時の訓練なんて役には立たないという事が判明する。

誰しも、席を立つものはいない。楽し気にその場に待機している。
「気持ち悪……」
そんな中ただ一人、叶はその場で吐き気がしていた。この地震が、ただの地震でない事を悟ったからだった。
「大丈夫なのかい？」
隣で、異常な叶の体勢に冷静沈着に歴史教科を読んでいた朔夜が問いかけてきた。
「顔色悪いよ……保健室行った方が良いんじゃないかな？」
「平気や……ただこの雰囲気が……」
おぞましい霊気。それが、地震の源になっている事を悟った。
「……先生！塚原君が気分悪いと云ってますから、僕が保健室に連れて行きます」
すると頼んでもないのに、朔夜は叶の腕をとり上げて保健室へと促した。

「たいそうな事あらへんよ」
結局保健室に連れてこられた叶は、ベッドに横になり朔夜に語る。
「塚原君？キミ……霊が見えるんじゃない？」
突然云い当てられ、叶は愕然とした。何故そんな事が分かるんだ？そう云う目で問い返す。
「何でそんな事判るんや？」
「ここの所、僕の夢に塚原君が出てくるんだ」
「はあ？」
理解に苦しむような事を云って退けるのは何なんだ？叶は、溜め息が出た。
「どうやら、キミとは縁が有るらしい」
そのあと、叶が朔夜のテストをカンニングする夢を見ると云う、訳の分からない事を口走っていた。
「僕にとって、良きパートナーになるのはキミじゃないかなと、そ

う想ったから」
何を云ってるんだこいつは？とも想ったが、何故だか不思議と癒されるから、怒る気も失せる。
「さっきの地震……何かの予兆じゃないかと正直僕は目星を付けてるんだ……この学校の生徒から来る依頼が、凶として表れている。今のままじゃ一騒動が起きてもおかしくはない」
すると、何か？この都住というヤツも何かに気がついてると云うのか？それとも……
「僕は、夢占いと、夢の売買はできる。でも、霊に関しては、範疇じゃないから……」
まるで、人の考えている事を読んでいるかのようなその言葉に愕然とした。この都住には嘘をつけないかも知れない。
「ああ、この学校。かなりの自爆霊があちこちにおるわ……俺、見えるんよ。校門前に、教室の隅。至る所にな……それに、体育館の南側に位置する所…あそこは昔、防空壕が在った場所なんやわ」
こんな話をして信じる者がいるとは想えないから、それにきっと気味悪がられるだけだから……実際、そんな事を云った先に待ち構えていた沈黙は、今でも忘れられないトラウマ。
「……そうなんだね。ありがとう。これですべてのことが解決できそうだよ」
朔夜は『フッ』と笑うと、右手を差し出した。
「塚原君の力が必要だ。是非、僕の力になってくれないだろうか？」
これが友情の印だとでも云うかのように、握手を求めてくる。
それを、どう受け止めたらいいのか悩んだが、
「ええよ。俺なんかの力が必要やりたらいくらでも貸したるわ」
叶も、右手を差し出す。
変な話、こういう事で仲良くなることは不可能だと想った。でも、必要とされることが嬉しい事だと内心喜ぶ自分がいることに気がつき、苦笑いした。
「夢占いクラブに入らない？夢をみないって云うのも関心するんだ

けど、近くにいてくれた方がもっと夢を理解出来るような気がするから」
こうして朔夜は、勧誘を熱心に勧める。
そしてそれが、全ての事の始まりだった。

「地震？」
家に戻った叶は、早速今日あった出来事を話した。
「かなりな揺れやったんやけどな……気付かなんだ？」
「そんなものありはしなかったわよ」
不思議そうに話すおばさんは、忙しそうに夕飯のおかずを作っていた。
やはり、勘は当たっていた。全ての元凶は、学校に有る。
「おばさん、今日のおかずなんなん？」
話を擦り替える事が得策であろうと叶は想い、良い匂いのするキッチン横に有る木の椅子に座り込んだ。
「後少ししたらできるから、宿題でもしていなさいね？」
優しく笑いかけてくる。
こういった家族が叶の理想だった。宿題は癪に障ったが。
「あ、俺、部活に入る事になってん。帰りが今迄より遅なるけど……かまへん？」
結局、朔夜が創立した部活に入る事になった。文化部なんて、何だか性に合ってないかも知れないなとは想ったが、熱意ある勧誘に心を動かしていたから。
「叶ちゃん、部活入る事にしたんだ。それは良い事だわ。帰り遅くなっても構わないわよ。どうせ、お父さん帰って来るの遅いんだから」
おばさんに、コロコロと笑って鍋の中のカレーをお玉でかき混ぜている。
「ただし、宿題だけはちゃんと忘れずにするのよ～」
改めて念を押される。

「分かっとりますがな。きちんと学生の本分だけはけじめ付けてやりますよって」
渋々2階の白分の部屋へと上がり始める。
宿題なんて適当にこなしてればそれで問題にないわとその時は想っていた。
後々考えてみると、この勉強嫌いが未来の叶のキャラターを作るとも知らずに。

#4　はじめの一歩

▼はじめの一歩

「じゃあ、夢占いクラブに入ったの？」
麗華は、素頓狂な声を出した。それが教室全体に広がる。
「入った云うても、今日から通う事に、なるんやけどな」
「なら、私も入ろうかな？」
「え？」
麗華は急に意気込み始めた。
「テニス部はどうする気なんや？」
やめるきかいな？とばかりに叶は目を瞬かせた。そんな簡単に変えられるものではないやろう？とさえ想っていた。
「掛け持ちよ！私のバイタリティーをなめてもらっちゃいけなくてよ！ウフフっ」
麗華は、これしきの事こなしてみせるわとでも云うかのように、叶を見返えした。
叶の前の席は休み時間のため空席になっている。そして今はそこに麗華が居座っている状態であった。
「塚原君、私好みのタイプなんだよね～いつも一緒に居たいんだなあ～これが！」
何を根拠にこんな短い間のことで、云えるのか？不思議ではあったが、自分に行為を抱かれるのは嬉しいものだ。それに麗華は可愛いし。
ただ問題なのは、こう、直接的な感情を包み隠さずぶつけられる事であった。
「宮原さんがそう云うんなら、都住に入部届け出しいな。きっと喜んでくれると想うわ」
その言葉に、

「もち！今すぐ提出するわ！」
麗華の行動は早かった。
都住の前に行くと、麗華は入部届けを受け取りその場で記入した。
それをさっさと提出する。
「これから楽しなりそうだわ！ううん？部活に張りが出来たって云うのかしらん？」
まるで、叶の恋人気取りで席を後にする。
それは、午後の授業が始まるそんな矢先であった。

「ここが、部室なんです」
朔夜は、叶と麗華を案内した。
第一校舎の４階。ちょうど音楽室の隣の教室。たまに、歌声が聴こえてくる。
案内されたその部屋の扉を開けたとたん、叶は絶句した。
暗幕で閉じられた暗室。そこに五人の少女が輪を作った椅子に座っていたからである。

「今日は、夢の相談者が集まってくれてるんですよ。みなさん、かなり疲労困憊していて、受験ノイローゼ気味なのですが……」
おびただしい自爆霊の空気が渦を巻いている教室の中に座っている少女達。そこに歩み寄る、朔夜。
それなのに叶は一歩も教室に足踏み入れることが出来なかった。
余りにも気分が悪くて。
「へえ～。この先輩方知ってるよ！いつも、ランキング１０位に入ってるじゃん！」
叶の行動に気付く事なく足を踏み入れる麗華。全く動じる事などない。この霊気を感じる事が出来ないから……かえってそれが羨ましく感じられる。
「塚原君？」
朔夜は、叶の行動に気付き、

「やはり、感じてるんですか？」
麗華は、その言葉に振り返る。
「どうしたの？塚原君入れば良いじゃん？」
叶の腕を掴んで引き込もうとする。その勢いの良さに、叶の頭はクラクラしていた。
「大丈夫ですか？今日はやめておいた方が良いかも知れませんね？」
「？」
麗華は、きょとんとして、朔夜と叶を見比べた。
「何の話？これから占いするんでしょ？」
麗華は、少女達に近づき、
「ねえ、どんな夢見てるの？教えて教えて～！」
彼女の持ち前の明るさは、此処にいる少女達を不思議と和ませるようで、大分雰囲気に一筋の光明が出来たように感じられた。それが一つの救いだったのか、叶は、一息付くと教室の最後列の一つの席に座り込んだ。
すると教室前半分が広く空き、輪になって囲んだ椅子が並んでいるのが見渡せる。
全ての席は、後方へと押しやられていた。空間が狭いと感じたのは一種の気の持ちようだったのか？単に、雰囲気に押しつぶされた幻覚だったのか？それは良く分からなかった。ただ、纏わりついてくる霊に苛立ちを感じていた。
「塚原君？結界を張る事はできませんか？夢の世界に入るのに、彼女達の身の安全を第一にしたいと想っていますから…体調悪いのでしたら無理にとは……」
「やるわ！」
叶は憤慨していた。気分が悪かろうと何だろうと、この場を締め付けている霊気に腹が立っていた。
自分が逃げ出した陰陽師修行。
しかしそんな事など忘れたかのように……ただこの状況は、無性に腹にすえかねでいたのであろう。

受験を苦に自殺した自爆霊が、自分に擦り寄ってくる。生きている者には関係ないだろう？そう云い放ちたかったから。
「えっ？塚原君？どうしたの～？」
いきなり立ち上がった叶に驚いたのか、麗華は叶を振り返った。そして不思議そうに大きく見開かれた瞳は叶を確実に捉えている。
立ち上がった叶は、スタスタと歩き始めると、黒板から一本のチョークを取り上げて、輪になっている椅子の周りに五芒星を描くと、印を結ぶ。
「善星招来　悪星退散！」
すると、澄み切った空気が暗幕の外から流れ込んできた。
「きゃっ！」
麗華は声を上げていた。五芒星の中に巻き上がる空気の流れを僅かではあったが感じたからだった。
「結界は作ったで……あとは、都住はんの出番や！」
お手並み拝見とでも云うかのように再び元の席に着く。
すると五芒星の中央に立った朔夜は、真直ぐ手を前に差し伸べた。
「一人一人、催眠術を掛けます」
そう云うと、掌の少女達の目の前に翳した。そうすることで、彼女達は深い眠りへと沈んで行った。
最後の一人が催眠術にかかり、眠りに沈み込むと、
「少しの間、何があろうとこのままの状況を放置しておいて下さいね」
云い残すとバタリと朔夜は床に倒れ込んだ。それがどう云う事なのか理解に苦しんだが、叶は、朔夜の云う通りの行動に出た。慌てて麗華が中に入り抱き起こそうとしているのが目の端に入ったからである。
「やめとき。ここから先は、俺らの出る幕じゃないわ」
叶は、自分の行動が何を意味してこういう事になるのか、実際分かってはいない。だけど、そうしないといけない領分なのだと悟った。

朔夜のことが不思議でたまらなかった。だけど、すべては朔夜の腕にかかっていると信じたのである。

真っ暗な闇。
そこに散りばめられた星々。
朔夜はここが、宇宙である事が分かった。
五人の少女達が、フワフワと横になって浮いている。
不思議な光景。
五人一緒の夢をこの場所で見ているのだとしたら奇妙なことではあるが、朔夜の目にはその少女達が、何者にも捕らえもれる事なく浮遊している事を如何せん何とかしたかった。

現実逃避

この現状から逃げ出したいがために、見る夢がこういった類いの夢である。
「彼女達を、自らいるべき所まで引き上げなければ……」
この宇宙に変わって必要なもの。それを考えた。
すると遥か彼方に美しく蒼く光る星が見える。それが地球である事を悟った朔夜は、一つの案を想い付いた。
「太陽だ！」
まずこの少女達を地球に戻し、太陽にさらされる土地へ誘う事。朝日を感じさせる事。それだと想った。
しかし、まだ朔夜自体、夢売買を自由にこなせる程にはなっていない為か、躊躇する面が多々あった。
あの時の事が今でも蘇る。

夢占いは、先祖代々受け継がれてきた事であり、平安時代から都住家の家業でもあった。
それを、平成の世に受け継がれてきたまま自分の能力を日夜励み

とし、行う事が朔夜のなすべき事だと自負している。そして、それは父の遺言でもあった。

若くして逝ってしまった父。

父の身体は、占夢者家業の果て、悪霊に取り憑かれ、衰退して行ったのであった。

母は、朔夜が五歳の時、離縁していた。

旦那を知れば知る程遠ざかって行ったのだ。親権は父、拓哉のものとして離婚時取り決められ、都住家は跡取りを無くす事なく安泰だった。

しかしそれから毎日占夢者修行が行われてきた。夢占いの基礎から、催眠術、一般的知識を絶えず父親から学ばなければならない。

父が家業で出て行った先では、必ず朔夜も同行していた。そうする事で学ぶ事は多かったから。そして初めて自ら仕事をこなしたのは、十歳の時である。

弱り切った老婆の夢占い。

どこにでもある、髪が抜け落ちてしまうと言う老いへの恐れからくる占夢。

しかし、軽い気持ちで挑んだその夢の売買は、大きな落とし穴があったのである。

その老婆に悪霊が取りついているなど、考える事までは頭に回らなかったのであった。

占夢の最中、真っ黒な闇が自分を襲ってきた。長い黒髪が自分を締め付けてくる。こんな経験をする事はあり得ない。夢は、当人を脅かす事はあっても、決っして占夢買人を襲う事はない。

そんなもがき苦しむ自分を助け出してくれたのが父拓哉であった。

しかし、二人同時に入り込んでしまった夢は、後者の人物へと魔手を差し伸べたのである。

それからというもの、拓哉の容体は一変した。
日に日に痩せ衰えて行くばかりで、残された朔夜は、その看病で手が一杯だった。
学枝も行かなければならない。父の看病をしなくてはならない。確かに、都住家宗家からの援助はあった。しかしイタコや、霊媒師への依頼を始めた頃には虚しくも、父のしをとどめる事は出来なかったのである。
朔夜は悔やんだ。
自分に、もっと力があれば……霊感を感じる事ができる陰陽師、霊媒師の力があればこんな事にはならなかったのに……と。
だけど、自分は出会った。

塚原叶と云う人物に……

そんな事を想い出しながら、一つ、息を吐き出すと朔夜は五人の少女の手を結ばせて、
『神聖覧強、夢売買致します！』
輪の中心に立って浮遊している五人に呪文を唱える。
すると、流れて行く景色は地上の白い砂浜の海岸に辿り着く。五人と朔夜は静かに下り立った。穏やかな海は、綺麗な蒼を従え、昇ったばかりの太陽の下煌いていた。
暫くすると、五人の少女は起き上がろうと覚醒に入る。
「もう、この場所を去らなければ……」
きっと、この朝日をあびて彼女達は自信を取り戻す事であろう。そう願って……

五芒星の中で、朔夜が起きあがったのは、ほんの十分後くらいの事であった。
「もう、丈夫ですよ……」
朔夜は、貧血気味の青白い顔をして、叶に語りかけた。

叶は、五芒星を黒板消しで消しにかかる。
「あとは、俺が全て片を付けなあかんのやな？この学校を取り囲む自爆霊の始末や……」
そう、元凶を取り除かない限り、夢を見る人達の心を救う事は出朱はしない。
それは、朔夜の目を見れば分かった。そう、語っているのだなと……
暫くすると、少女達は椅子から立ち上がった。
みんな、顔色が良くイキイキしていて、今までの沈んだ顔が嘘のようであった。
ロ々に、
「ありがとう。肩の荷が下りたって云うのかしら？前向きに何かに取り組めるって云うのかしら？……」
と、朔夜を取り囲んで今までのことが嘘であるかのように語り始めた。
「ねえ、何が起こったの？よくわかんない～！」
麗華は訳が分からないとでも云いたげに、叶の肩を揺すった。
しかし、叶はその事には触れなかった。
自分だって今しがたまで行われていた朔夜の行為なんて知る由もない。だけど、少女達が悪夢から目覚めたと云う事だけは分かった。
それが、朔夜の行った事なのだと。

#5　四方への言霊

▼四方への言霊

「あれがお前の力なん？気持ち悪いとか想った事ないん？俺は自分のカが気持ち悪くてたまらんわ」

帰り際、朔夜を叶は呼び止めた。

麗華はその後、『訳が分からない』と云い残し、テニス部へと戻って行った矢先の帰宅途中の事である。

学校の門で持ち伏せていた叶。ある意味納得が行かない想いがあったから。

「陰陽師にも、お札ってのがあるんよ。手のひらに書く祓悪夢符ってのがな。俺は、それを行なった事はないんやけど。でも、初めて見たわ。そう云う類いの悪夢払いは……実際どうやってるん？」

不思議だった。倒れ込んでからの空白の十分間。自分は、夢をみないから、こう行った事の範疇から遠ざかっていたことであった。

「僕の力は占夢。夢を売買する事なんですよ。よく云い継がれている、貘のようなものでしょうか？ただ、貘は夢を食べるのですが、僕は食べませんけどね」

クスリと笑った。

そんな中、悪夢なんて食べたくもないわな。と叶は想った。

「つまり……」

朔夜は、全ての事を叶に話せて聞かせた。占夢者人の事を。そして、自分が何故、叶を必要としているかという事も。

「残念やったな……親父さん」

「しんみりした話になってしまいましたね」

朔夜はそれでも笑っている。

何故笑えるのか？叶には理解が出来なかった。

自分とは違って、全てを受け入れて立ち向かっている人物が直ぐ傍にいる。それとは全く逆の自分。これは反省すべき事なのか？いや、そんな事はない。
何とか自分を奮い立たせる。
選んだ行動の違い。考え方の違い。環境の違い。が、すべて二人の進むべき道を作っている。
そして。偶然にも出会ってしまった。
そう想う事にした。
「明日、この学校の自爆霊を解数する。そうすることが、なにより大切な事に感じるわ」
話をはぐらかせる。
そうすることで、今の自分を開放させる事ができるのではないかと気が付いたから……
「じゃあな」
簡単に言葉を切ると、二人は別れた。

―放課後―

「あれ？塚原君。今日は夢占いクラブには行かないの？」
生徒のざわめいた教室が、これから解放されるんだと云う歓喜に満ちた中、叶は荷物を片付ける。その姿を目にした麗華は問いかけた。
「あ、えとな……ちょう用事があんねん。また明日な？」
「そうなんだ……残念。また明日ね！」
叶は、鞄の他にもう一つバッグを持っていた。それを肩に担ぐと、朔夜に声を掛ける。
さすがに、麗華に自分が陰陽師（仮）である事など知られたくはなかった。きっと忌み嫌われるであろうとそう感じたから。
そそくさと、叶は教室を出て行った。
その後を確かめるかのように、朔夜は教室を出て行ったのである。

「これで最後やな」
この学校の校舎はちょうど方位に並列して並んでいる為東西南北が分かりやすい位置にあった。
その四方を取り囲むように、護符を聖石に張り付けて埋めて行く。ただ校舎の何処かに張り付けるだけでは剥がれ落ちる恐れがあったから。
「……一番ええのは、祠を立てて、供養する事なんやけど、俺に『それをしろ』云われてもどうにもいかんしな。誰かこの符を掘り起こさないとも限らんけど、一番の得策やねん」
叶は云い添えた。そして、
「この学枝の中心はどこになるんやろか？」
「二番校舎……の屋上はどうかな？」
まだ、この学校の見取り図が把握できてない叶を朔夜が補佐する。
そして、二番校舎の屋上へと二人は移動した。
屋上の入り口に、立ち入り禁止と紙が張ってあるが、そんな事は知ったこっちゃないとでも云いたい気持ちを込めて、叶は『バンッ』と、扉を開いた。
冬の冷たい空気がブワッと流れ込んでくる。
「ここは一度、飛び降り自殺者がいた場所なんですよ」
云われなくても分かっていた。叶の前に広がる空と、コンクリートの狭間から少年がこちらを見ている。
人は何故こんなに弱いのであろうか？
そう感じた。
たかが受験だろ？一度の失敗で、何を苦にする必要があるって云うんだ？残された方の身にもなってみろよ。と、霊に叫んでやりたった。
「ま、取り敢えず始めるわ」
バッグから、結局大阪から持ち出してきた、もう使われる事も無いと想っていた白い袴を取り出して、制服の上に羽織ると、ふうっ

と息を吐き出す。
そして、
「臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前！」
叶は縦、横に九字を切ると、勢い良く、念を放った。
この校舎を取り巻く空気が一気に身体を突き抜けて行くかの勢いで、空中へと舞い上がる。
そして、新たな新鮮な空気が取り巻いてくる。
「これで、一先ず安心や、やっかいな自爆霊もこの辺りに近寄る事はないと想うしな」
叶は、気分が良かった。
一つの事が終わると云う事を成し遂げたのはこれが初めてであったかのような気分さえ感じる。
本当は、幼い頃から身に付けなければならない事だった。だから何度も経験はしている。好きにはなれなかった事だけれど……それが当たり前の環境だったから。しかし誰も、自分の事を褒めてはくれなかった。そう。当たり前の行為。
実の母親には気味悪がられるだけだったし、父には、腫れ物でもみるようかのような目で見られた。
誰もが口々に、重要な人物になると云ってはいるが、その裏の感情が手にとって分かる聡しい子供であった。
一つ間違えば、人の感情まで読み取ってしまうかとも想えるくらいに幼少の叶は敏感な子供であったから。
今はもう人の考えている事を悟るのをやめて少しでも、気晴らしになれるのであったなら上出来だと想っている。
そんな叶の気持ちを察してか、
「ご苦労様」
朔夜は、叶に独特な落ち着いた笑顔で話し掛けた。
「おう！」
叶は、笑顔でそう応えたのである。
こうして、この事件は無事片付いたかとも想われたが、冬休みに

入ってからの年明け。重大な事件に発展していく事を、この時は知るはずも無かったのである。

#6　真っ白な空気の奥に

▼真っ白な空気の奥に

正月はいたって平和に過ごした。実家に帰りたくはなかったので、一切連絡もせず、おばさん達と共に正月を迎えた。

おじさんは、未成年の叶に、『正月くらい良いじゃか』とお神酒をすすめてくる。叶自身、この待遇を受け入れた。かえって嬉しかったからである。

クラスメイトから年翼状が届く環境。極平凡な学生生活が叶にとって心地よかった。自らも、年賀状を出した。蛇年だったから蛇のような、くねったタオルのような落書きを必死になって描いた叶は、こんな日々がいつまでも続けば良いのにとさえ想っていた。

「明日から学校よね？学校からの宿題きちんとこなした？」

おばさんは、必ずこの事を口に出す。もちろん万全に……とまでは行かないが、ある程度の範囲はこなしておいた。判らない問題は、スッとぼけておく事にする以外は。

そんな落ちついた冬休みを過ごした後の新学期そうそうは雨だった。

寒空に傘をさし、叶は学校へと歩いた。

今まで感じていたあの妖気はもうこの場所にはない。そう感じた瞬間、天候とは裏腹に気分が爽快だった。

「おはよう〜塚原君！」

クラスの女の子が叶に声を掛けてくる。叶は、男子生徒より、女子生徒に人気があった。そのためか、時々、目の端に男子生徒の冷めた視線が突き刺さった。しかし、

「よう、おはようさん！」

とにかく気にせず、声を掛ける事を止めない。

しかし妙だ？
一つ気に掛かる事があった。いつもまとわりついてくる、麗華の姿が見当たらない。
「宮原はんは？」
一度気になると、叶は止まらない。いつも麗華と仲の良いグループの明美に話しかけた。
「妙なんだよね。お正月の初詣に誘ったのに連絡取れなくてさ……塚原君の方には連絡無かった？」
何かと叶と話していた為か、鉾先が自分に向けられる。しかし、麗華からは音沙汰無かった。考えてみれば、年賀状が来なかったような気も……
そうこうしてる内に、ホームルームが始まる。担任は何も麗華の事を語らなかった。
しかし、それから二、三日経っても麗華は学校に来る事はなかったのである。

「塚原君？ちょっと……」
そんな五日目が過ぎようという頃、朔夜は放課後叶を呼び止めたのである。
「何や？」
どうせ部活の話だろうと想って話を聴こうと足をとめる。
「昨夜、夢に宮原さんが出てきたんだけど……気になる事が有るんです。今日、一度宮原さんのお宅に行ってみたいと想うんですよ。付き合ってもらえないでしょうか？」
事実、叶も気になっていた。こんなに長い間、麗華が学校に来ないなんて……考えてみると変である。人一倍の明るさを持った彼女は、元気をもたらしてくれる。ちょっと、うるさいかもとも想える所がなくもないが……
「ええで、で、家は分かるんか……？」

「ええ。調べましたから」
話は即決まった。
その後二人は、素早く行動に出たのである。

モダンな家並みの住宅街。
その中に際立って、豪筆な屋敷が目に入った。それが麗華の家である。
叶は知らなかった事ではあるが、麗華は宮原財閥のお嬢様であったらしく、目の前にある門構えもセキュリティーを兼ね備えた、最新式の構造になっている。道理で、あの人懐っこさはここに現れてたんだと納得がいった。
しかし、
「これ……どういうことなん！？」
叶は、しゃがみ込んで吐き気をもよおした。それを朔夜は、
「塚原君？大丈夫ですか？何か有るんです？」
この様子はただ事ではなかった。叶の体質は朔夜も知っている。
「何でここに……学校の自爆霊が……おるねん……しかも、無害だった防空壕の……うぇ～！！」
近くの電信柱に寄り掛かるようにして、全てを吐き出す。ただならぬ妖気が、叶を締め付けるよう促してきたからであった。
「ダメや……はよ何とかせんと……」
吐くものが無くなった叶は、フラフラと立ち上がり、朔夜に、
「中に入らせてもらってくれんか……？そう、頼んでや……」
云われた通り、冷静に対処する朔夜。内心この状況をどう把握したら良いのか？それをよく判っているかのように。
「すみません。宮原さんのクラスメイトなんですが、プリントを届けに参りました。あと、事付けが有りますので、是非宮原さんにお会いしたいのですが？」
インターフォンに向かって流暢に話し出す。そんな朔夜に叶は慣れたものだなと想った。暫くすると、インターフォンから女性の声

が流れてきた。
「お嬢様は、ご気分が優れませんので、私がお聞きします……」
そういうと、門奥のドアが開かれ、一人の年輩のおばさんが出てきた。何だかイソイソしていて落ち着きがない。
「どのような事でしょう……？」
朔夜は取り敢えずプリントを渡した。そして、
「宮原さん、大事には到らないんですか？」
落ち着いて、何でもないような顔で話す朔夜。
「あ、はい……その……」
まだるっこい相槌が叶の心を揺り動かす。
「大丈夫な訳ないやろ！この状況を把握でけへんなんておかしいわ！はよ、中案内せえ！」
その言葉を聞いたおばさんは、叶の気迫に押されたかのように、再び中へと入って行く。十分後、不眠症な目つきをした一人の女性が変わって出てきた。
「娘は、大変体調が優れません。変わりにお聴き致しますから、今日の所はお引き取りください……」
目線は、金髪頭の叶に向けられていた。どこの不良がやってきたのか？と云わんばかりに冷たくあしらう。
「あんた、娘に何が起きとるのか分かっとるんやろ？それやのに、そのまま放置しとくつもりかいな！！」
叶は、気もちの悪さに苛立ちながらも続ける。
「いつからなんや？霊媒師は呼んだんか？早せんと、取り返しのつかん事になる。俺を中に入れ……」
叶の言葉が終わり切らない内に、絶叫が響き渡り、２階の窓ガラスが割れた。破片が飛び散り外へと落ちてくる。そして庭に、アンティーク風の椅子が転がり落ちてきた。
「麗華！」
母親が、蒼い顔でその場を離れようとするのを朔夜は門の鉄棒子の隙間から腕をとり止める。

「開けて下さいませんか？」
母親は、蒼白な顔で一瞬固まったが、門の電源を入れると、すんなり門は開かれた。そして母親を先頭に三人は直ちに屋敷内へと足を向けたのである。

#7　未来へ

▼未来へ

麗華の部屋は、意外に少女趣味な感じで、その中でも天蓋付きフリルのベッドには圧倒された。
今さっき割れた窓が、寒い風を運んできている。
しかし、事態はその後急変を知らせる事なく、穏やかではあった。
「麗華！」
駆け込んで行く母親は、麗華に覆いかぶさるようにして、抱き起こそうとしている。
「塚原君？」
朔夜は、確かめるように叶の顔を眺める。
「念のため、結界張らなあかんな……何でこうなったんか、確かめん事には話が始まらんわ」
麗華の意識はないようで、ぐったりと母親に寄り掛かるように眠っている。
「都住くん……あんた、今、宮原はんの意識階層に入るなんて事は出来んのか？何か探り出せるんやったら、早い方がええから」
その言葉に、朔夜は一度視線を麗華に注ぐが、
「深層心理に入り込む事は、今までした事はないんですよ……夢を見ている所を覗く事は出来ますし、その占いは出来ますが……一つ条件が有るんです」
深刻な言葉に、叶は一瞬言葉を待った。
「僕は、丸一日の徹夜明けでないと、その事が出来ません。昨日睡眠をとったのが、午後九時……夢に宮原さんが出てきたのが、午前一時……つまり、明日の午前一時までは、夢の中に入る事は出来ないという訳です……」
言葉と裏腹な冷静な態度が、叶には信じられなかったが、この時

点で、麗華の衰退しているのを起す訳にはいかず、なすすべはないから当然ではある。それがはがゆくて、叶は苛立つが、どうしようもない。
「午前一時なんやな……丑三つ時で、霊が活動しやすい時間や……」
ブツブツと言葉を漏らしてみる。
しかし、待つしか無い。一刻をあらそうのに、待つしかないなどとは……しかし、法はそれしかなかった。
「僕にもっとカがあれば良かったですね……」
それを感じ取ってか、ほんの少しだけ、朔夜の気持ちが読み取れた。顔に出す事は決してしないタイプなんだなとその時初めて叶は理解した。
「……せなら、さっさと結界張るわ。おばさん！後は任せとってな。俺ら来たからには、もう、安心やから！」
「え？」
麗華の母親は、一瞬躊躇はしたものの、叶達の話を受け入れこれに賭けてみようとそう想い立った。
学校全体に術をかけたのは、叶自身である。その事が、母親の意志をはっきりさせた要因でもあったからだ。
「後はお任せします……」
納得してはいるものの、疲れ切った母親は男子二人を残して部屋を出るのを躊躇いはしたが、一旦休む事を告げる。

午前一時。

それが全ての始まりだと叶と朔夜は決意を新たにその場に待機した。

「塚原君……少し休んだ方が良いんじゃないかな？時間が来たら起してあげますから？」
夕食を御馳走になり、家の方に連絡を入れた叶は、実際眠くて仕

方がなくなっていた。さっきから、胡座をかいた叶はうつらうつらとまるで船を漕ぐかのように揺らいでいる。
十時頃には既に床に就いているのが、叶の日課でもあるから、これはまた、人間のバイオリズムの一貫なのだからしょうがないわけだが。
「ん？悪いなあ……俺、眠くてしょうがないわ。起してくれるんやったら、よろしゅうな……」
そのまま床の上にバタリと倒れ込む。
その様子を呆れる事なく、朔夜は見守る。
それよりも自らがすべき事を考えつつ、結界の張られた天蓋の柱を見守る。
今の所は、霊も騒ぎを起す事はしていない。部屋の四方に盛られた清めの塩も効果があるようで、すやすやと寝息を立てている麗華の姿が目に入る。
自らの力の無さ。
深層心理までをも凌駕出来るのであれば、もっと、夢を理解出来るのにと、以前から感じてはいた。しかし、そんな事出来るはずもない。
どんな文献を眺めようと、心の奥を掴み取る事ができる事は不可能だとそう熟知している。 夢にある世界を媒介に全てを読み取るしかない。それがが今の朔夜ができる事であった。

時は一刻一刻流れて行く。
こういった持つ時間は、焦りを感じる。
亡くしてしまった父の事を想うと気が気ではない。
それでも、今は叶がいてくれる。
それが、今自分を支えてくれているのだとそう信じる事ができるから、何とか保っていられる。
運命は、出会いがあって、別れがある。
でも、今出会ってしまったこの助け人を、大切にしたいとそう思

う。そしてきっとこれは、亡き父の配慮だとそう感じいる。
「頼みますよ……」
朔夜はボソリと横で寝ている叶に呟いた。

「塚原君……塚原君……時間ですよ！」
自らの体を揺り動かされて初めて意識が朦朧として覚醒する。麗華の部屋の壁に掛けられた時計を確認して、ガバッと勢い良く叶は起き上がった。
「悪りい！平気なんか？宮原は！？」
「この通り、ポルターガイストの状況だけはなんとかなっているようですが……魘されているようですね」
麗華の顔に脂汗が流れている。
「たまらんな……霊自体が、わんさか集って来とるわ…ろくでもないのばかりや！」
叶は、部屋中を眺めてそう告げる。
「結界内は、安心してええで、あと、食い止める方は俺が何とかしてやるから、行けや！」
叶が後押しする。
「あ、五芒星の中が安心できるから、その中で行けや。都住はんにも乗り移られたら厄介やしな！」
フッと、叶は笑う。それを確認すると、ガムテープで仕切られた五芒星の中に足を踏み込むと、一呼吸おき、朔夜はスッと床に沈み込む。
「後は任せたで！」
後に残った叶は、朔夜と麗華を守る為に呪文を口走り続けたのであった。

真っ暗でどこにいるのかも分からないような、まるで視界を奪われてしまったかのような、そんな右も左も判らない暗闇。
そこに今、朔夜はいた。

取り敢えず、暫く黙ってそこにいる事にする。この状況で動き回る訳には行かない。
自らの行動は、相手の意識を動かす事にもなりかねないからだ。
暫くすると、この暗闇に目が慣れてきたのか、朔夜は今自分がいる所がどこなのかを確認する事ができた。
埃っぽい、屋根裏部屋。
段ボールが一杯で、片づけもされていない。まるで使われていないかのようなその部屋の片隅で、蹲るようにして麗華が独り泣いている。
他には誰もいる気配がない。
朔夜は話し掛ける訳にもいかず、ジッと、麗華の行動を段ボールの端から見守っていた。
「ごめんなさい。ごめんなさい……」
小さく蹲っている麗華は、籠の中の鳥に話し掛けている。
二度と動かなくなってしまっている二羽の小鳥の死体。
「全部私が悪いの……あんな所に行かなければ良かったんだよね？私が悪いんだよね？」
籠の中の鳥を籠から出し、頬でその死体を撫で付けると煩を伝う涙がその小鳥の羽根に落ちた。羽根はもう羽ばたく事がなく、静かに折り畳まれている。
「あのね、学校は大好きなの。塚原君の行勤を見てるのが私の楽しみだったの……だって好きなんだもの……だけどね、まさかあんな事に係わってるなんて知らなかったんだよ」
憎悪？夢は麗華の心を暗示しているからその事が読み取れた。今自分に起きている事への憎悪をこの夢は暗示している。しかし、何かを解決しようとしているのは見て取れる。それが分かっただけで何かを引き出す事ができるのではないか？と朔夜は感じた。
「あんな事に関わって、私バカみたいだよね？あんな紙切れ埋めるなんて何をしてたんだろうって感じだよね？」
すすり泣きは怒りを込め始め、一気に頂点を極め始めた。

『紙切れ？』
現実に近い、夢をあからさまに見ている？それが深層心理の一遍だとそう判った時、ハッと気が付く事があった。
確か、テニス部の部室は、学校の南側に位置しており、護符を埋めたその場所をあの場所から見ることも出来たはず……多分見てしまったのだ。麗華は……そうと分かれば話は早かった。

『神聖覧強、夢売買致します！』

叶への怒りを感じ始めているのは好意の印ではあるが、それを考えつつ辺りを明るい部屋に入れ替える、暗闇ではなく、明るい陽射しのある屋根裏部屋。それはまるで、朝日が昇ったばかりのような場所であった。
それを感じ取ったのか、麗華は泣く事をやめ、そっと、寵に小烏を戻す。
「あれ？」
何かに気が付いたのか寵の中顔を埋める。
「卵？」
つがいであったのか、二羽の小鳥の卵が、巣の中に転がつていた。
そして、コツコツと物音がしたかと思うと『ピーピー』と、鳴き始める。
「……赤ちゃんがいたんだ……」
生まれたばかりの小鳥の赤ちゃん。それを見つめて麗華は微笑んだ。
その光景を後にしつつ、瓶夜はこの夢から抜け出した。
遠く広がる空に向かって。

「う……うん……」
朔夜は覚醒し始めると、叶に、
「おいっ！どうやった？何か分かったんか？」

防戦体制に入った叶は朔夜を振り返る。
重い体を持ち上げるかのようにして、朔夜は立ち上がった。
「どのくらい時間かかりました？」
「三十分くらいや」
自分が夢の中に入っていたその時間が気になるのか、一度問いかける。一刻を争うそんな場面。
「要は学校ですね。きっと南側の封印が破られてます……」
まだぼんやりとしている体をもたげながも、朔夜は切り出した。
「判った。ほな、コイツラを何とか学校に引き付ける。俺が霊媒になって、コイツラを引き付けたるわ。その間何が起こるか分からんが、案内してくれや！」
麗華の部屋に有る、ノートの紙切れに梵字を書き込みし、それを辺りにばらまく。そして印を結ぶ。
「憑代や。お前らこれに全てを引き込ませてくれるわ！」
そう云うと、空気の流れが変わった。
「くっ！」
体をクの字に曲げながら、叶は朔夜の方を借り、部屋を出た。
全てを引き受けて。

真夜中の学校は薄気味悪い。
門は完全に閉じられて、誰もが入れないよう管理されていた。
「塚原君？登れますか？」
背丈の有る門は、項丈に閉じられてはいるものの、容易く越えようと想えば出きないはずもない。
「何とかなるわ……悪いんやけど、手を貸してくれんか？」
本当だったら軽く乗り越える事もできるはずなのに、今はそういう訳にも行かない。そんな自分が情けないが、今ではしょうがない。
「南側やな？」
懐中電灯を携え校庭を横切りながら、2人は早速その場所に向かった。プレハブの部屋が在る場所を頼りに。

その横に桜の木が埋められており、確かそこにお札を張った石を埋めたのを覚えている。
そこまできて、何かを振り起こしたような形跡が有る事を発見出来た。お札を張ったはずの石が、半分に破けて転がっていた。
「けったいな事してくれるわ……」
叶は今しがたの憑代にした紙の裏に、返呪咀崇符の文字を書き込むと再び清石に張り付けて埋めなおす。
すると楽になった叶の体は、崩れるかのように地面に倒れ込んだ。
深夜の星空は澄んで綺麗に瞬いている。
「なあ。いっそ、祠でも作ってくれんかな？第二の犠牲者なんてお断りやわ……」
霊がこの世にいる限り、こんな事は日常茶飯事な事でもあるが、叶は今回の事で学校側にも責任はあるとそう感じていた。
「そうですね……そうしてくれるように、頼んでみましょうか？」
責任は学校だけではない。それは分かる範囲だったけど、供養をしないと云うのは、いささか問題は有ると想われる。霊と向き合って生きている叶にはそれが痛い程判っているのだから。気になるものは全て供養に廻して欲しいとそう願う。
「俺な、霊媒師やら、陰陽師やらそんなものになって生きているの苦痛やった……結局逃げ出したんやけど…やっぱこういう事はどこにでも有るもんやなってそう感じたわ…今さらながら、こうして、仕事して満足してるん不思議やわ……」
冬の外の寒気は、ひんやりと風が頬に撫で付けて行く。
「塚原君……」
「叶。でええよ」
二人は初めてお互いを認識し、笑える事ができた。
「明日は、また屋上や。この寒いのになんやなぁ～でも、俺にしか出来ん事やもんな。都住はん……名前、なんて云うんやったっけ？」
「朔夜ですよ。僕の事も、朔夜で良いですからね」
そこで再び笑い声が上がった。

明日には全て片がつく。
居心地の良い、誰も不幸にならないそんな日々が続くのかと思うとホッと胸をなで下ろすことが出来る。
「僕達良いコンビになれると想いますよ？」
「ブッ！それはこれから次第やな……」
叶は寝転がった地面から立ち上がった。
「はよ、帰ろうか？オレまた眠くなったわ……あ、悪いな、寝てないもんにそんな事云うてしもて……」
「いいえ、良いんですよ、僕は……こういう事が僕にとって一番の安らぎでも有りますからね……困っている人を助けるのが幸せなのですから」
そう云うと、幽かに微笑む。
「じゃ、途中まで行こうか？家どっちやねん？」
たわい無い学生の二人に戻る事ができた。それがとても居心地が良い。普通の。でも変わった能力の持ち主。それがこれからの二人の序章でもあった。

#8　エピローグ

▼エピローグ

「で？二人は知り逢った訳なんだ？」
万年コタツの6畳の部屋に集っている三人の内の一人が意外だとでも云うかのように話を聴いていた。
今は初夏。冷房がないこの部屋には、扇風機が活躍している。
「そうですよ。不思議な出会いでしょう？かえでちゃん？」
朔夜はいつも通り、ネットで桧索をしつつ、昔話をかえでに聴かせていた。
「でさ、叶って……麗華って言う子と付き合う事はなかったの？」
叶は、キッチンの椅子に足を組んで腰を掛けながら、団扇で流れ落ちてくる汗を乾かそうとしていた。
「……俺はかえでちゃん一筋やもん！」
「なんだ、振られたんだ！」
クククとかえでは笑う。押さえ切れなくて噴き出しそうな勢いを隠しつつ。
そんな中、冷静に言葉を発する朔夜。
「夢違えした覚えはないんですけどね……宮原さんの方から、寄り付かなくなってしまったんですよね？確か……」
「……別に終わった事やし気にしてないもんなあ……可愛かったし、お金持ちやからオレとはどちらにしても縁がなかった。ちゅうことやわ……」
ぶっきらぼうに答える叶の目線は泳いでいた。
「じゃあ何？あたしはその麗華って子に劣るとでも云いたいのかしら？」
こめかみに怒り印を立てながらかえでは嫌みたっぷりに問い返した。

「……そう云う事云っとるんや無いやろが！？」
二人の間にビシビシと流れるムードに、
「痴話げんかは後にして下さいませんか？またお仕事が来ていますよ。叶？」
メールを見ながら、二人の雰囲気を和ませるかのような微笑みで、朔夜は言葉を放つ。
「またかいな……俺、またバイトクビやな……」
煩杖をつきながら、珍しくとことん付き合う気分になっている。
「初心に戻ってのことかしらねえ？」
かえでは茶化す。
「懐かしいもん想い出したら、何でもできる気分やわな…かえでちゃんも、仕事頑張ってな？で、俺を養って～」
そんな甘い声につられるものかとかえでは舌を出す。
昔話に華を咲かせた今日一日。
また一つ、誰かを助ける為に。そして、夢を叶える手助けができるなら、それはそれで良い事かも知れないなとそう想う。

そんな昼間の出来事……

#8　エピローグ（後書き）

番外編は以上でした。
中学生の二人の馴れ初めでしたが、ま、こんな出会いもまた有りかなと。
次は、弐ノ巻（前編）となります。
またお付き合い頂ければ嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4814d/

占夢者人の夢　番外編

2010年10月8日15時59分発行